

第1回北九州市観光振興プラン検討会 議事録

- 1 開催日時 令和4年7月12日(火) 15時から16時30分
- 2 開催場所 AIMビル3階 315会議室(北九州市小倉北区浅野三丁目8番1号)
- 3 出席者(構成員) ※敬称略、50音順
入江 昭彦 植田 詩生 後小路 雅弘 加倉井 良多
菅本 美空 福島 規子 マッコームズ 夏野 南 博(座長)
- 4 議題等 (1) 次期観光振興プラン策定にあたっての現状の整理
(2) 質疑応答・意見交換

5 議事概要

(1) 次期観光振興プラン策定にあたっての現状の整理

事務局説明

(2) 意見交換

- 教育旅行の誘致にはツインルーム以上が求められるが、現在の北九州市内のホテルの殆どはビジネス向けのシングルルームタイプである。各宿泊施設が団体を受け入れるためにツイン等への改修が必要となる。中期的に整備すれば、修学旅行だけでなく団体客やインバウンドの受け入れにも対応できる。
- クチコミは人を動かす大きな力を持つため、まず市民が地元の魅力を知り、それを発信できれば強みになる。市民と観光客が同じものを一緒に楽しめるが良い。
- 「アート」は珍しいものがあるだけでは人は集まらない。まちづくりの中でどのように活かしていくのが重要となる。
- 北九州市はミュージアムがかなり多く市内全体に点在しているため、まち全体のミュージアム化が今後求められているのではないかと。
- 北九州市は広域でハブ的な役割を果たせるため、訪れやすく立ち寄りやすいことが重要となる。また、駅や空港、港等の周辺のコンテンツの拡充と、そこからの二次交通の充実が必要となる。
- ビジネスホテルではなく、観光ホテルを誘致すべき。北九州市には歩いていてわくわくするという点がまだ不足しているため、例えば、小倉ではまち歩きを促進するコンセプトの観光ホテルが適している。
- 教育旅行の誘致強化が必要。学生の段階で北九州市を訪れてもらうことが、将来的な経済効果にもつながる。全世代型観光素材が北九州市にはある。何度でも来てもらうための最初の段階として教育旅行は重要な役割を果たす。
- キラーコンテンツはなくとも、様々な観光資源があるため、個人ごとの好みに合った周遊ルートを提案する方法、例えば診断チャートなどを作ってみてはどうか。それをSNSや小倉駅の観光案内所等で広報したり、市民も活用できるようにしたりすることでクチコミの輪も広がっていくのではないかと。

- 「一度は訪れたい、何度も訪れたい」については、10年前も同じ切り口であった。昭和はSEE（見る観光）、平成はDO（体験する観光）、令和はSTAY（滞在する観光）と観光形態も変化している。訪れた地でどのように滞在させるかが重要。
- いきなりインバウンドなど大きなところではなく、まずはマイクロツーリズムについて考えてはどうか。暮らしても良い、アクセスしやすい、移動しやすい、という観点は、住んでいる人にも観光客にも良いはず。市民も暮らしやすい地域になるような都市計画を考えていく必要がある。
- 北九州市は九州・山口のゲートウェイになりうる。そのためにも、北九州市自体の魅力をもっと知ってもらう必要がある。
- キラーコンテンツは必要となるが、食は十分魅力的なのに知れ渡っていないし、夜景日本一も東京のメディアでは取り上げられていない。SNSを活用するなど、キラーコンテンツと定めたものを徹底的に活かすことが必要。
- 企業のミュージアム等、体験型施設が大変充実している。子供だけでなく大人も学べる施設として、今あるものをもう一度しっかり訴求していくことが必要。
- 「人の未来を創る観光都市」について、住んでいる人の視点も重要。狭い意味の「観光」のみならず、経済、社会の活性化に役割を果たす「観光」として、広義に捉え、新しい人の流れを創るという視点で検討すべき。
- ビジネス、スポーツ等も含め、多様な目的で北九州市に来た人に情報を届け、ついでに観光をしてもらうことも大切。
- 旧5市等にこだわる時代ではなく、バランスを重視しつつ重点化を図ることが必要。
- 今回の計画期間は5年間だとしても、目標の内容によっては、もう少し長い目で見て実現を目指すことも重要。